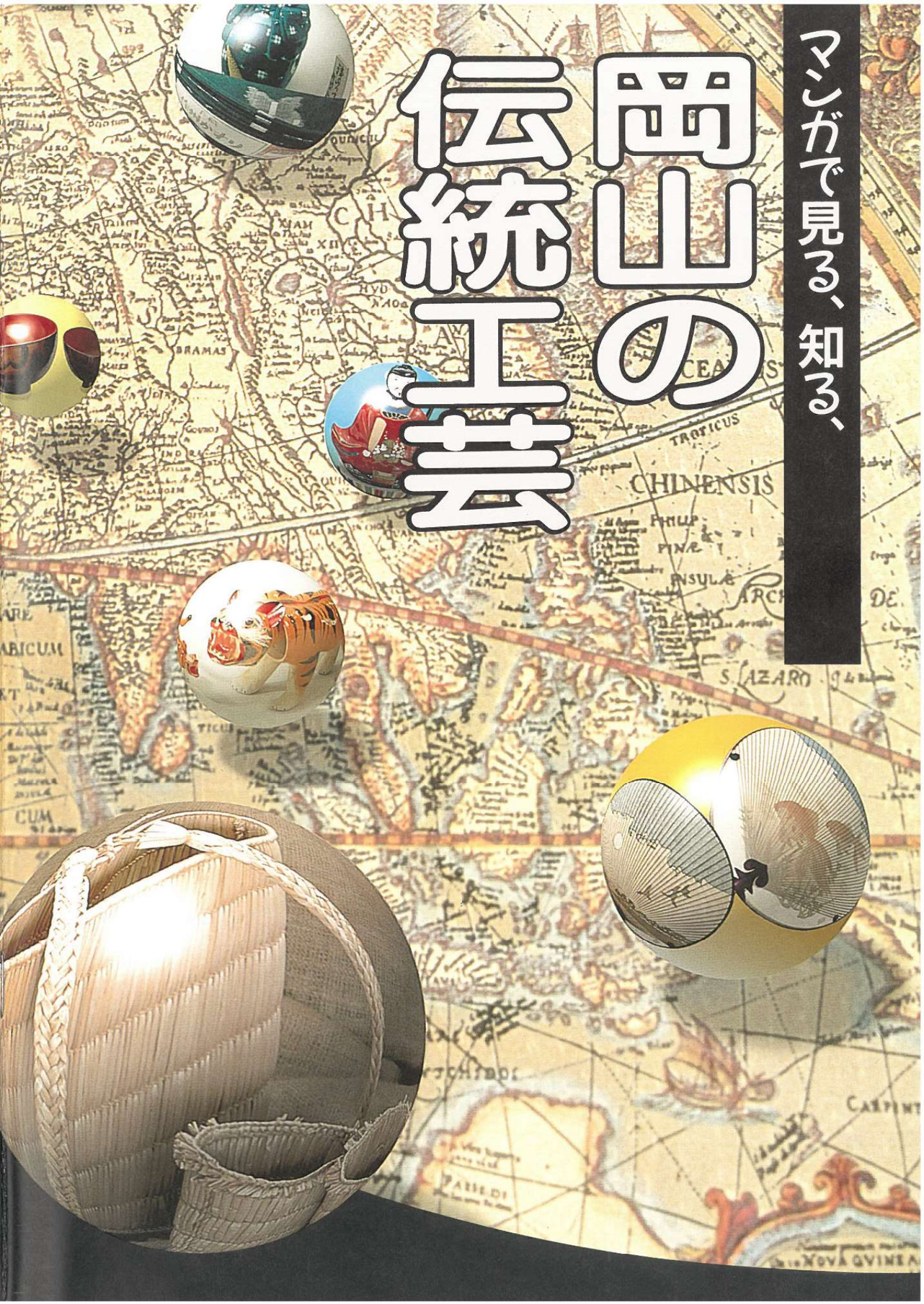
マンガで見る、知る、

岡山の伝統工芸



はじめに

岡山県に優れた工芸品がたくさんあるのは，あたたかい気候に恵まれ，古くから文化が栄えてきたからです。

昔から伝わる技術を使い，天然の材料を使って，主に手で作られた伝統的工芸品は，地域の生活の中で使われてきたもので，自然の良さが生かされているため，私たちの生活に豊かさと潤いを与えています。

今，伝統的工芸品は日本だけでなく，海外の人々にも注目されています。

それは，伝統的工芸品が，日本の文化と日本人の心を，よく表現しているからです。

もくじ

伝統的工芸品のできるまで 2

伝統的工芸品と他の産業とのかかわりあい 6

伝統的工芸品の歴史 8

伝統的工芸品とは 12

復活した工芸品 13

伝統的工芸品の悩み 14

岡山県の伝統的工芸品 16

備前焼/びぜんやき 16
勝山竹細工/かつやまたけざいく 17
倉敷はりこ/くらしきはりこ 18
津山箔合紙/つやまはくあいし 19
手織作州絣/ておりさくしゅうがすり 20
撫川うちわ/なつかわうちわ 21
備中和紙/びっちゅうわし 22
高田硯/たかだすずり 23
がま細工/がまざいく 24
虫明焼/むしあげやき 25
烏城細/うじょうつむぎ 26
津山ねり天神/つやまねりてんじん 27
郷原漆器/ごうばらしっき 28

伝統的工芸品のできるまで

日本の伝統的工芸品の技術の多くは，中国や朝鮮半島からやってきた人々によって伝えられ，その後，スペインやポルトガルなどとの貿易によって，様々な国の文化や技術の影響を受けながら，進歩していきました。

もちろん，外国からやってきた技術ばかりではありません。長い歴史のなかで日本独特の技術が育ち，りっぱな工芸品になったのです。

それでは岡山県を代表する**備前焼**のできるまでをみてみましょう

1 さい採土

水田を2mから5m掘ったところに，良質の粘土があります。長い年月をかけて自然の力が作り上げたものです。

これを，農作業のない冬の間に掘り出して，数年間かけて乾燥させ，くだきます。さらに，くだいた土を水にとかして，ゴミをとりのぞいて，適当なかたさになるまで自然乾燥させます。



2 土練り

適度に乾燥させた土は，足でよく踏んで，またくだいて，いらないものを取り除きます。それから手でよく練ります。「土練り3年」といって簡単そうに思えても，よい焼き物を作るためには，とても重要な作業です。



3 「ろくろ」ひき



大きい作品を作るときは，粘土をひものようにして輪をつくり，それをつんでいきます。最後に，ろくろを回してしあげます。

作品が小さいときは，必要な量だけ粘土をろくろに置いて，手に水をつけて，ろくろの回転によって形をつくります。



4 窯づめ・窯焚き

作品を置く場所によって火のあたりかたや，温度がちがうので，どの場所に置くと，どのようになるのか，みんないっしょうけんめい研究しています。長年の経験と，よいものを作ろうという気持ちがなければ，思ったようなものができないのです。

作品をつめ終わると，10日から14日間ほど，窯の温度に注意しながら，火をたき続けます。

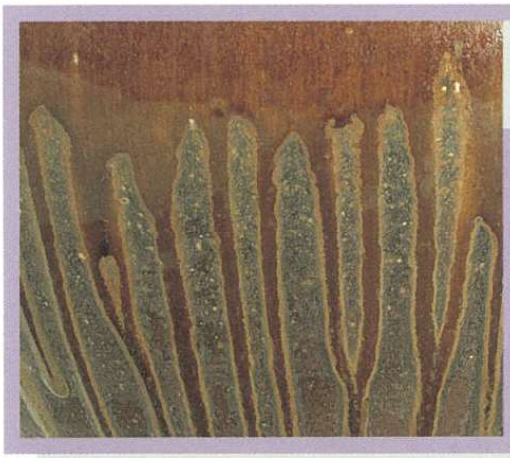
5 窯開き

火をとめて，１週間ほどして窯をあけますが，まだ人が中に入れるほどには，温度がさがっていません。温度が下がるのをみはからって，窯から出した作品は，ひとつひとつていねいによごれをとり，みがきをかけます。



備前焼の特長

釉薬を使わない備前焼は，窯の中の状態でさまざまな模様ができます。



胡麻

燃料の松割り木の灰が熱でとけて，胡麻をふりかけたような模様になります。火の近くにおかれた作品によくあらわれます。灰が多くついて，とけて流れた状態のものを「玉だれ」といいます。

桟切り

ネズミ色や青色の模様になります。窯の床に置いた作品は，灰に埋もれて火があたらないうえ，空気の流れが悪いので，いぶされて色に変化がでます。



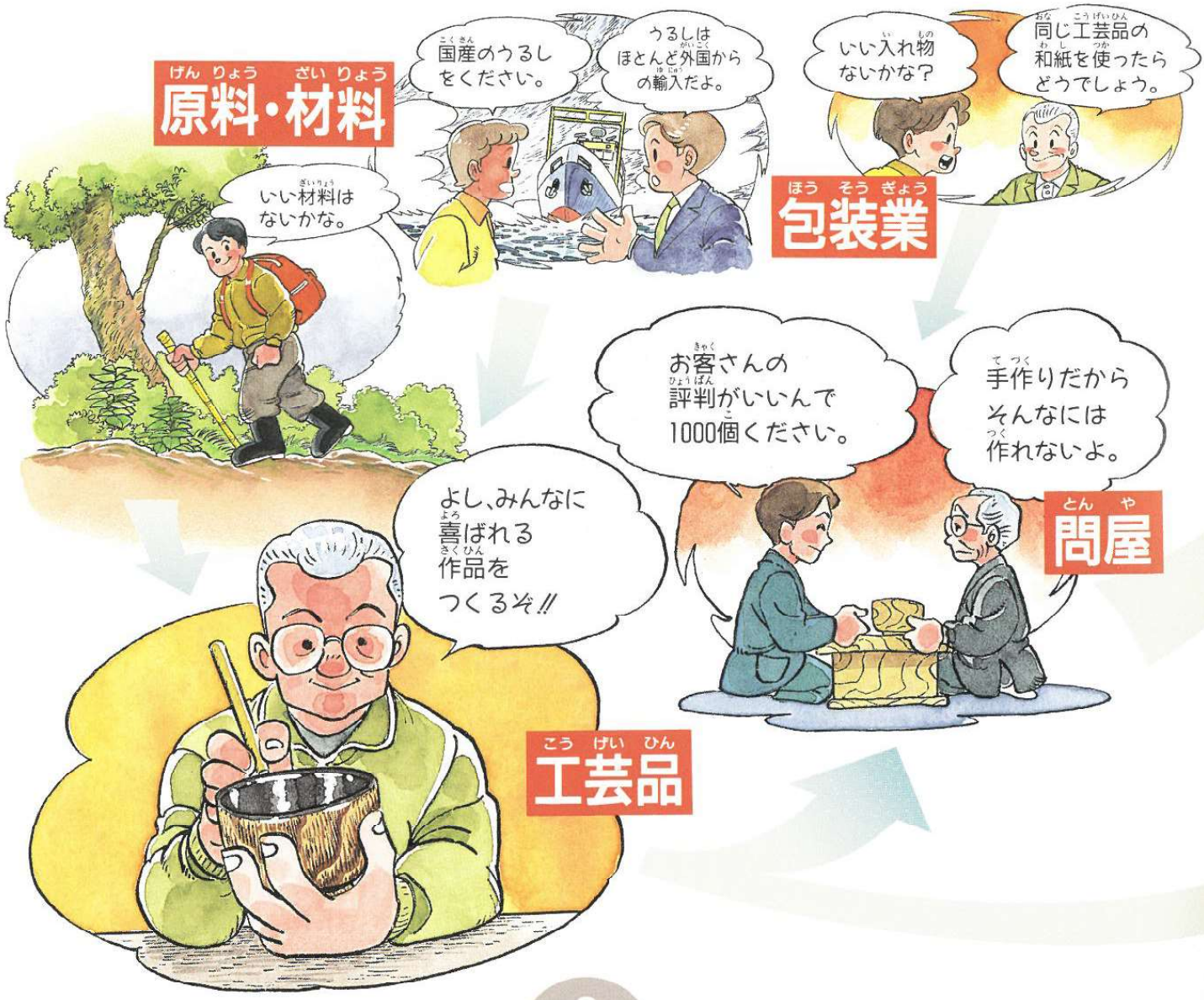


緋襷

直接火があたらないように，大きな作品の中や，別に作った入れ物に入れて焼きます。温度が低いので，色白に焼き上がります。赤や茶の模様は，作品がくっつかないように，わらをまいて入れるために，その部分だけ違う色になります。

伝統的工芸品が私たちの手にとどくまで

産地で職人さんによってつくられた工芸品も，
他のさまざまな商品と同じように
現代の販売経路にしたがって，いろいろな人々の手をへて，
私たちの目にふれるようになります。
伝統的工芸品が，わたしたちの手に届くまでに，
どのような産業とかかわりあいをもつのでしょうか。



伝統的工芸品と他の産業とのかかわりあい



地域のくらしがわかる伝統的工芸品

伝統的工芸品といわれるものは，
同じ使いみちの道具でも，地域によって
色や形や材料がまったくちがいます。



たとえば，陶器は，
使われる土や焼き方によって，
独特のものができあがりますし，
織物は気候のちがいによって織り方や
材料がちがってきます。

また，宿場や，米などの商品の集積地，
城下町など人々が多く集まるところでは，
くらしが豊かになるにつれ，みやげものが
売られるようになり，子供のおもちゃなども作られるようになります。

こうして伝統的工芸品ができあがったのです。



このように，伝統的工芸品は，それぞれが作られた地域の，歴史や文化や立地条件をよくあらわしているのです。

1 江戸時代にさかんになった

戦乱の世から国が統一され，平和になると，さまざまな産業が発達しました。

江戸時代の国の基本は農業でしたが，くらしを豊かにするために，多くの大名は人々に手工業をすすめ保護しました。こうして地域に産業が発達するようになったのです。

郷原漆器 山陰地方に大量に出荷されました。



備前焼 岡山藩が奨励しました。



虫明焼 岡山藩の家老が奨励しました。



2 その土地でとれる原材料を使って

当時は，交通手段が発達していなかったので，原材料がとれる地域で生産をするのがふつうでした。

また，大名たちは，自分の国が豊になるようにするため，自分の国の原材料を使うことを奨励していました。

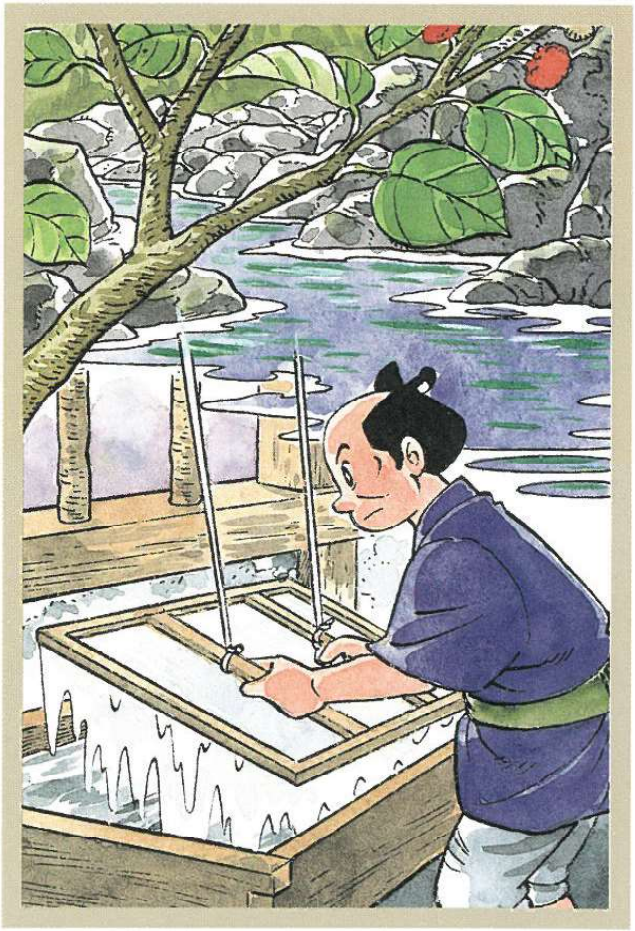
高田硯

硯を作るのにぴったりの良質の石が豊富にありました。



備中和紙

和紙の材料であるこうぞがたくさんありました。



3 その土地の立地条件から

門前町や，宿場町，温泉地など人々が多く集まるところでは，もともとその土地の生活用品であったものが，旅人の目にとまり，めずらしい品物として，おみやげに買われるようになりました。こうしてだんだん産業として発達していき，伝統的工芸品になったものもあります。また，田畑で農作物が作りにくい地方や，雪がたくさん降って，冬の間農作業ができない地方で副業として発達したものもあります。

撫川うちわ
参勤交代の西国諸大名の目にとまり，有名になりました。

がま細工
勝山竹細工
冬の間の副業として発達しました。





伝統的工芸品とは

私たちが住んでいる岡山県にも，
工芸品といわれるものはたくさんありました。
しかし，安いねだんで大量に作ることができる，
新しい産業が発達してくると，
どの工芸品産業もおとろえてしまいました。

工芸品は手工業なので，大量に作れないし，
安く作ることも簡単ではありません。

そこで，国や県や市町村が，こうした工芸品のうち，
これからも生産を続けて行こう，という気持ちがある
産地の人々を応援することにし，
国が法律を作るなどして指定しました。

工芸品のなかから指定されるための条件

日常生活の中で使われている



主に手で作られている



作る技術が江戸時代までに完成した



天然の原料や材料が使われている



人々の努力で復活した工芸品もあります

近代的な産業の発達とともに
おとろえていった，伝統的な工芸品産業は，
すでに生産をしていないところもたくさんあります。

新しい産業が生みだす製品は，
ひとつひとつに個性や特徴はありません。

しかし，新しい産業は，大量にしかも安く作ることができるばかりか，現在の生活に便利なものを作りだしたので，みんなが使うようになったのです。

こうしたなかにあって，昔作られていた工芸品を復活させようと努力している人々もいます。私たちの子孫に，地域の歴史や文化を伝え，大量に作られたものにはない，手作りのよさを知ってもらうためです。



▲**備中和紙**は，ダムの建設によって産地が水没しましたが，倉敷市に場所を移して復活しました。



▶**郷原漆器**は川上村の工芸品です。作る人がいなくなっていましたが、村の人々の熱意で復活しました。

伝統的工芸品の悩み

長い年月をかけて，技術がみがかれ受けつがれ，
日本だけでなく海外の人たちにも
注目されている伝統的工芸品ですが，
伝統的工芸品産業にたずさわる人々には，
それぞれにかかえる悩みがあります。
それはどんなものでしょうか？

伝統的工芸品を作るには，高度な技術が必要です。伝統の技術を身につけるのは，そうそう簡単なことではないのです。また昔は，技術を秘密にしていたところもあるくらいです。

伝統の技術を身につけた後けい者を育てる

しかし，今では技術研修会などが開かれて，伝統技術の基本を学ぶことができますし，ほかの産地の人達と協力して，新しい技術や材料の研究なども行われています。



天然の材料の減少



天然の材料を使って作るだけに，限られた資源を有効に使わなければいけません。

備前焼に使う粘土もかなり掘り尽くされ，残り少なくなっています。また，開発が進み，山や林や田畑がなくなるなどして，天然の材料が減少しています。

消費者の好みの変化

日本人のくらしや，生活のしかたに，アメリカやヨーロッパの文化が入りこんで，消費者の好みが大きく変化しました。そのため，デザインを変えるなどいろいろなくふうをしています。

- 備中和紙 ―― 封筒
- 作州絣 ―― ネクタイ
- 備前焼 ―― ビールジョッキ
- 勝山竹細工 ―― パンかご



備前焼●びぜんやき

（産地　備前市）





岡山県を代表する陶器で，鎌倉時代（1200年ごろ）には，
かなりの量が生産されていたことが知られています。
室町時代のおわりごろ（1500年から1600年ごろ）には，
現在と同じひよせという土（水田の地下から
堀り出したねんど）を使うようになり，
備前焼の基礎ができたといわれています。
江戸時代になると，岡山藩の重要産業の一つとして，
藩が生産をしょうれいしたことから，
たいへん盛んになりました。
　しかし，明治から昭和のはじめにかけて，
備前焼はおとろえてしまい，
土管やれんがを作って生活をするありさまでした。
　今，備前焼が繁栄しているのは，
苦しい時代にあっても新しい技術の研究や，
人々に受け入れてもらおうとする努力を
続けてきたからです。

勝山竹細工●かつやまたけざいく

（産地　勝山町）



江戸時代のおわりごろ（1800年ごろ），
雪に閉ざされた冬や木材仕事の合間に，
自分たちが使う日用品を作ろうと
始まったもののようで，製品は
がっしりしていて，当時の農村の生活が，
伝わってくるようです。

この竹細工の特徴は，マダケ（真竹）の皮をむかずに，
青竹のまま使っていることです。
作られている製品は，以前は農具（穀物をいれるざる）
でしたが，いまでは現代の生活にむいた，
パンかごや花入れなども作られています。

また生産は，共同の作業場で行っており，
全国でもたいへんめずらしいことです。
こうした生産の方法は，技術をたがいに教えあったり
情報のこうかんの場としてたいへん役だっています。

倉敷はりこ●くらしきはりこ

（産地　倉敷市）





江戸時代のおわりごろ（1800年ごろ），
岡山に江戸（現在の東京）から
「昇り猿」と呼ばれたはりこを作る木の型が伝わり，
はりこを作るようになりました。
これが，岡山県における，はりこの生産のはじまり
といわれています。

また，ほとんど同じころ，倉敷においても，
ひな人形や，武者人形を作っていた人が，
男子の誕生を喜んで虎のはりこを創作しました。
これが倉敷はりこの始まりといわれ，
その虎が近くの町でも評判となり，
男の子の節句の飾りものとして
使われるようになりました。
今では，虎のほかに干支の動物なども作られています。

津山箔合紙・つやまはくあいし

（産地　津山市）





▲みつまたの木

津山市横野地区で作られている
手漉き和紙は，もともと
県北一帯で作られていたもので，
奈良時代（700年から800年ごろ）にまで
さかのぼることができます。
しかし，明治以降，
機械で生産する洋紙がふえると，
しだいにおとろえていきました。
しかし，箔合紙とも金箔台紙ともいわれ，
薄くのばした金箔をはさむのに使われる和紙だけは，
京都や金沢などの
金箔の産地で使用されることから，
生産され続けています。

手織作州絣・ておりさくしゅうがすり

（産地　津山市）

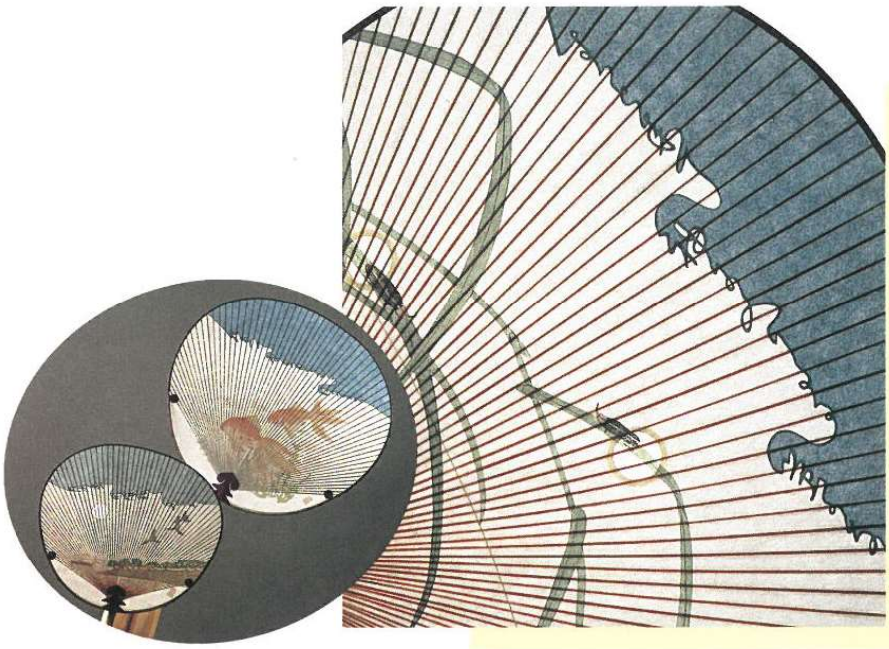


津山市周辺は，昔から絹織物の産地でしたが，
江戸時代のはじめごろ（1600年ごろ），
安くて丈夫な着物地として，
庶民の間で綿織物がはやりだしたので，
山陰地方から綿の栽培と，綿織物の技術を導入して，
綿織物が織られるようになりました。

現在では，１か所だけで生産されているにすぎませんが，
現代の生活にあった製品を作る努力をしています。
着物の生地だけでなく，のれん，テーブルセンターなどの
装飾品やネクタイなども作られています。

撫川うちわ・なつかわうちわ

（産地　岡山市）



「すうと来て
袖に入りたる
螢かな」◀

江戸時代のはじめ（1600年から1700年ごろ），
三河（愛知県）の武士の間で，うちわが作られていました。
その後，城主が岡山県にうつってきたのにともなって，
領内の商人によって広く販売されるようになり，
この地方の有名な工芸品になりました。
しかし，明治時代になると，
実用的で安いものが大量生産されるようになったことから，
しだいにおとろえていきました。

特徴は，「歌継ぎ」といって雲の模様にみえる文字が，
実は2枚の別々の紙をはりあわせたものであることと，
「すかし」という技法を使って，
光をあてると，花や月の模様がうかびあがって
見えることです。

備中和紙●びっちゅうわし

（産地　倉敷市）





和紙を作る技術は，平安時代のはじめ（800年ごろ）
奈良地方から伝わったものといわれています。
平安時代になると仮名が発達したこともあり，
紙の材料となる木（こうぞ）がたくさんあった
岡山県の北部は，和紙の産地となりました。
もっともさかんになった時期は江戸時代であったようです。
明治時代になると，洋紙におされて和紙の生産は激減し，
「清川内紙」という和紙だけが，
備中町の成羽川沿いで細々と漉かれていました。
しかし，それも昭和39年に新成羽川ダムの建設により，
産地がなくなってしまいますが，
和紙の復活を願う人々の努力で，
生産の場所を倉敷市に移して，
「備中和紙」として生産が復活しました。

高田硯●たかだすずり

（産地　勝山町）



高田硯が文献に登場するのは室町時代中ごろです。
また、江戸時代のはじめ（1650年ごろ）には，
さかんに作られていたようで，
江戸時代中ごろ（1760年ごろ）になると，
原石（材料となる石）を藩の所有にして，
石の採取を制限するほどでした。
明治以降，しだいにおとろえていきましたが，
近年，再び石のよさや技術の高さが評価され，
全国に知られるようになりました。
高田硯は，原石から硯になるまでのほとんどの作業が，
手作業であるため，１日に２個くらいしか作れません。
また，使用している原石は，１億年も前に堆積した
黒色粘板岩と呼ばれているものです。

がま細工●がまざいく

（産地　川上村）



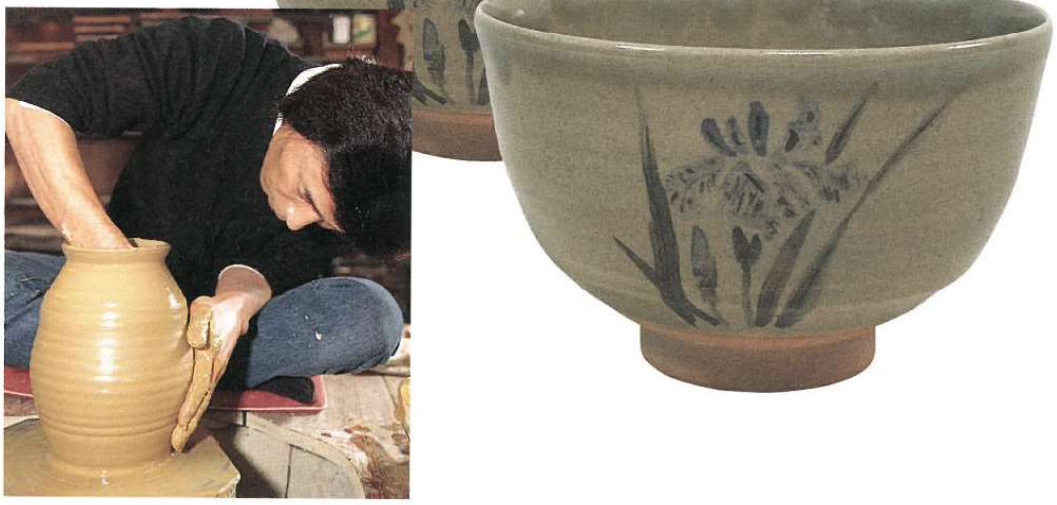
▼がまの刈り取り



がま細工の起源は，よくわかっていません。
なぜなら，日用品であるため，昔のものが残っていませんし，
古い文献にも紹介されていないからです。
しかし，言い伝えによると，
600年ほどまえの南北朝の時代に，
がまで作った背負いかごを使用したのが
はじまりといわれており，古くから蒜山地方で，
日用品としてよく使われていました。
がまは，雨や雪を防ぐためにすぐれた草で，
これを編むのは木の皮の繊維で作ったひもが最もよく，
雪国に欠かせない雪ぐつや
生活用品の弁当箱などが作られてきました。
最近では，民芸品やみやげ品として作られています。

虫明焼●むしあげやき

（産地　邑久町）



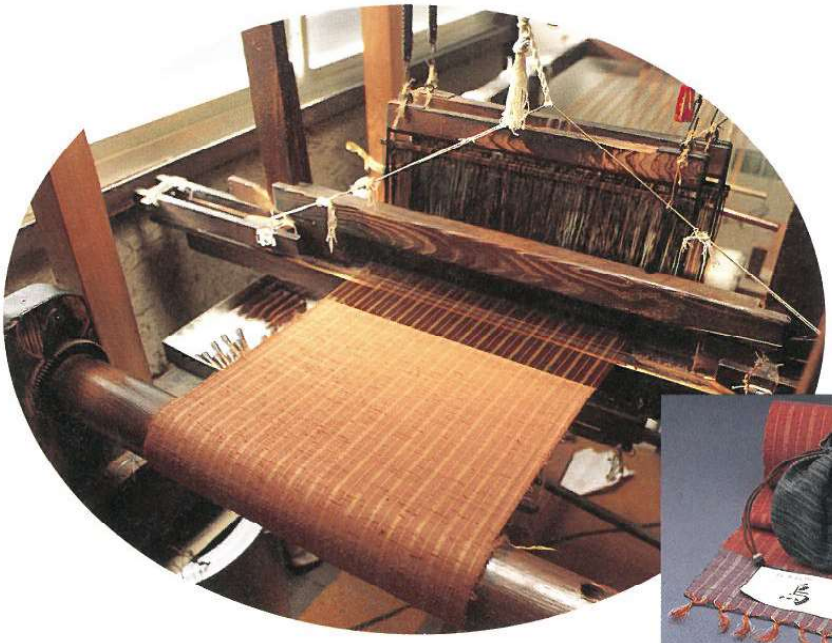
邑久町虫明は，海上交通の重要な港町として栄えていたため，朝鮮半島の，釉薬を用いた焼き物がはやくから伝えられていました。虫明焼はそれを手本に焼かれはじめたものではないかといわれています。

現在の形ができあがったのは，江戸時代の中ごろ（1750年ごろ）のようで，その後（江戸時代のおわりごろ），京都の技術が伝えられ，その影響をうけるとともに，新しい釉薬の開発によって，他にはみられない焼き物として有名になります。

虫明焼の特徴は，他の焼き物に比べて薄くてかたいことと，緑がかった薄茶色の色合いにあります。

烏城紬●うじょうつむぎ

（産地　岡山市）





烏城紬は，もともと灘崎町で生産されていました。

灘崎町では，江戸時代のおわりごろ（1800年ごろ）から綿織物の生産がさかんに行われていたのですが，同じようなものがあちこちで作られるようになると，あまり売れなくなったので，もっと高い値段で売れる，絹織物を作る人たちがあらわれました。

これが烏城紬のはじまりといわれています。

烏城紬は普通の紬よりも，経糸が少なく，緯糸を撚っていないので布がしなやかです。

そのため，着心地が良く，大変温かい着物に仕上がります。

もちろん絹の優雅な光沢や色，しま柄模様は江戸時代のまま作られています。

津山ねり天神●つやまねりてんじん

（産地　津山市）





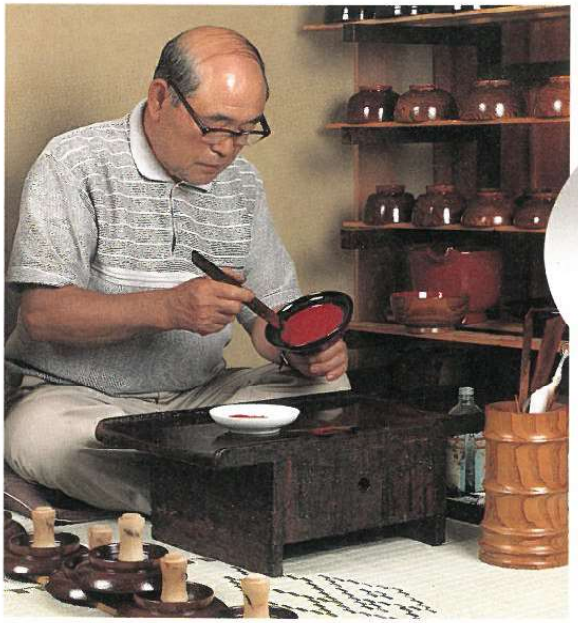
作州（津山市周辺）では，３月３日に天神様をまつる，男の子のひな祭りの風習があります。
津山ねり天神は江戸時代の中ごろ（1700年から1800年ごろ），今の勝央町で作られていた，人形がはじまりといわれています。

ねり天神は，泥をかためただけで焼いていません。なぜなら，古くなったりこわれたりした人形は，川に流し，自然の土にかえるように，焼き物にしないという風習があるからです。

この男の子のひな祭りの風習も，昭和の時代になるとしだいに忘れさられていったことから，ねり天神は生産されなくなりました。
しかし，戦後再び製作されるようになり，民芸品として現在にいたっています。

郷原漆器●ごうばらしっき

（産地　川上村）

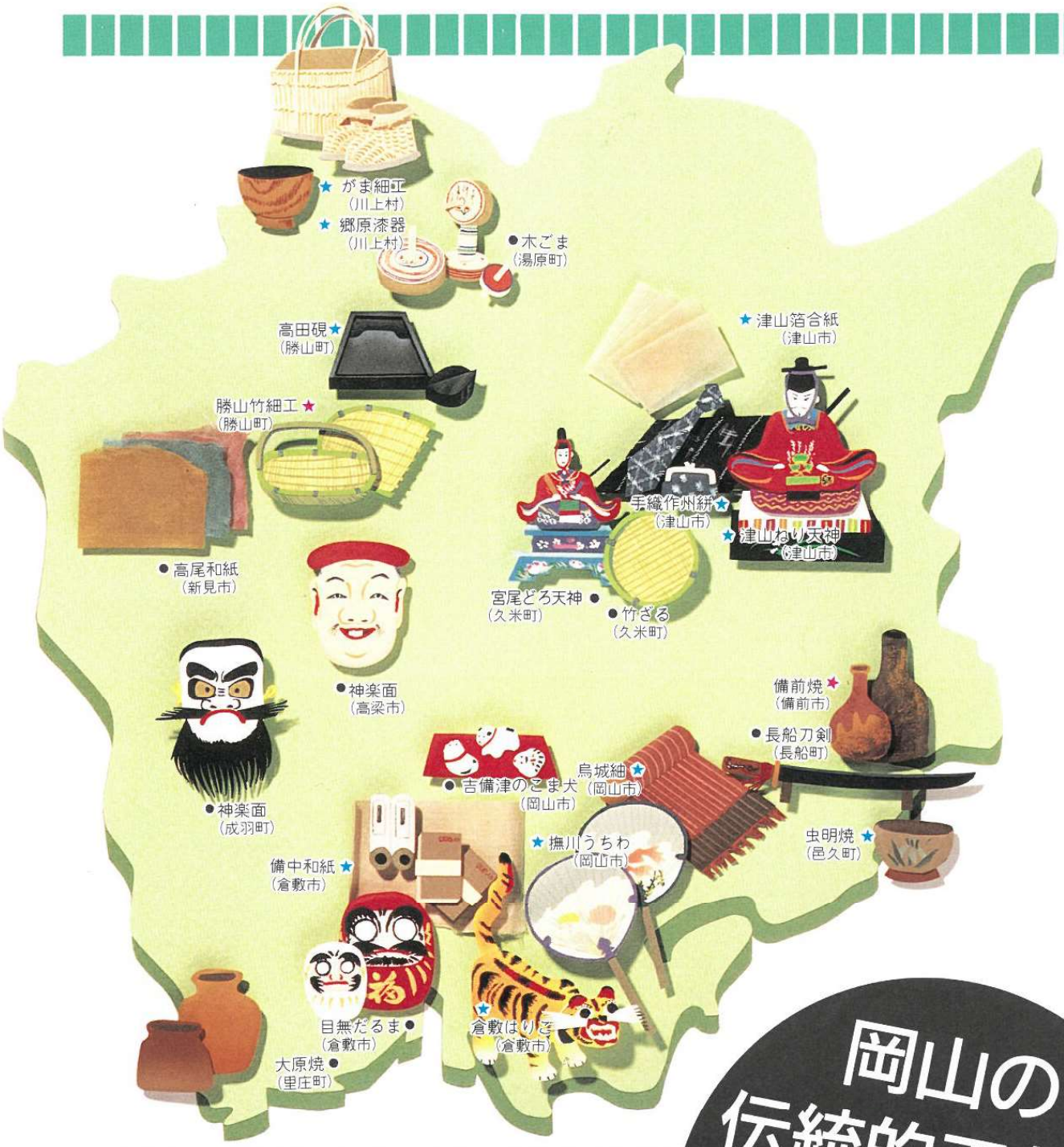




室町時代のはじめごろ（1400年ごろ）が，
起源といわれている郷原漆器は，
600年の伝統をもっています。郷原漆器が最も大量に作られ，
技術や技法が発達したのは江戸時代で，
当時山陰地方を中心に数多く出荷され，
日用品として使用されてきました。

しかし，時代の進歩とともに，金属やプラスチックを使った安い日用品が生産されはじめると，おとろえていきました。
第２次世界大戦の後，郷原漆器は作り手がいなくなり，
生産は途絶えてしまいましたが，昭和60年ごろ地元の人々が
伝統を再び復活させようと努力した結果，
伝統の技術と現代感覚が調和した漆器が
作られるようになりました。

郷原漆器の特徴は，栗の木を使うことと，
木を乾燥させずに，生木のままろくろでひいて，
形を作るところにあります。



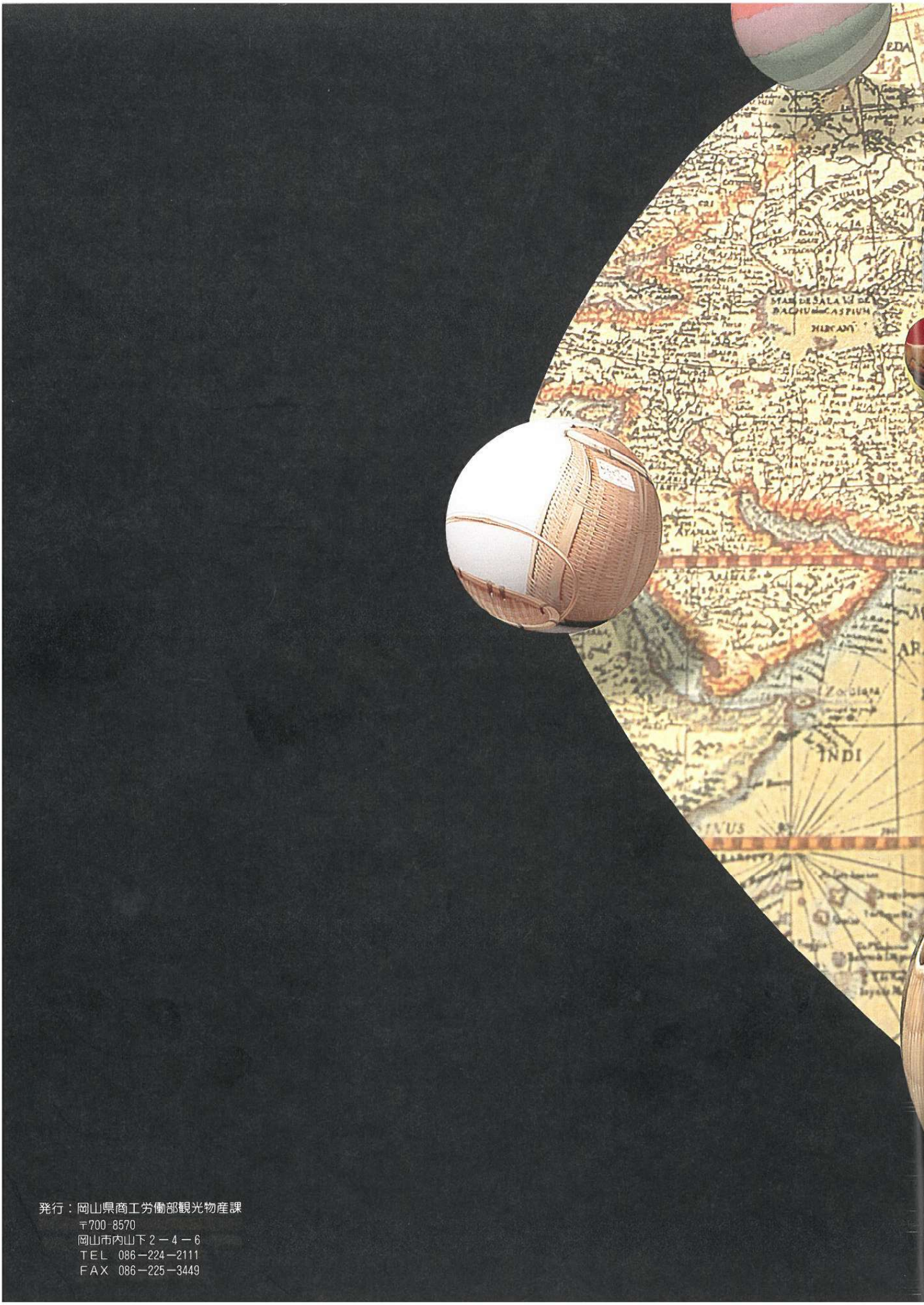
岡山の伝統的工芸品マップ

★は国の指定を受けたものです。

★は県の指定を受けたものです。

●は指定は受けていないが、
昔からある主な工芸品です。

発行：岡山県商工労働部観光物産課



発行：岡山県商工労働部観光物産課
〒700-8570
岡山市内山下２－４－６
ＴＥＬ　086－224－2111
ＦＡＸ　086－225－3449